
月下の契り

dig

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の契り

【Nコード】

N3252K

【作者名】

dig

【あらすじ】

月の下で、泡と消える。幕末の夜。

天の月。

海に映る月。

あなたの美しさよりも、今は手の温もりを。

あなたに向かって、落ち行く我はただ…闇に沈んでいく。

顔を上げれば、月が揺れ、我の生が遠ざかる。

月揺れて

この世の運命 さだめ

泡と化す。

嘉永7年一月。

第十二代將軍徳川家慶の死去を知ったペリーは、去年幕府と交わした一年という猶予を破り…半年で、再び浦賀に姿を見せた。

前年より多い…十隻の蒸気船は、江戸中の人々を不安と恐怖に陥れていた。

新たに將軍の座についた徳川家定は病弱であつた為に、この混乱を抑えることができなかった。

磐石だと思われていた徳川の世が、崩壊へと向かい始めた時期…月岡夢時は、母親に呼び出されていた。

「失礼します」

質素な襖を開けると、祭壇の前に、母親が正座していた。

月岡家は、代々將軍家に仕える旗本であつたが、少し特殊な役目を担っていた。

それは、月詠みと呼ばれる占いである。

かつて、その占いはよく当たると評判であつた。

しかし、眞実のみを告げ、政の為の嘘をつくことができない…融通のなさ、公の場から、月岡家を遠ざけていた。

それでも、その予言的中率は凄まじく、無視することはできなかった。

それ故、危険性だけが重要視され、時の幕府に半ば幽閉のように、旗本として召し抱えられ続けていたのだ。

「夢時殿。そなたが、この家の当主となられ、どれくらい経ちます

か？」

神妙に座る母の前に、夢時も正座し、

「もう二年になります」

「二年ですか…」

母親は呟くように言うと、じつと夢時の目を見つめながら、口を閉じた。

しばしの時が流れた。母親はため息をつくとき、おもむろに口を開いた。

「ご先祖様が、大和の広陵の地から、この地に連れて来られてからはや数百年…。我が家は旗本として、上様にお仕えして参りました。しかし、それも…もう終わる時が来たのです」

母親の衝撃的な言葉は、月詠みによって、得たものであろう。

「母上！」

驚きを隠せない夢時を、母親は愛おしそうに見つめ、

「お父上がお亡くなりになり、二年。そなたが、跡を継がねば、この家はおとり壊しになっていたでしょう。だが…月岡家において、真の当主は、女子おなごなのです」

母親が次に口にする言葉に、夢時は気付いた。

「母上！その話は、やめて頂きたい。私が死ぬまでは、口にしない約束ではございませんか！」

夢時の言葉に、母親はゆっくりと首を横に振り、

「そなたは、もう十六…隠し通せる歳ではございません

「母上！」

「私は…今回のお告げに、内心安堵しております。これでやっと…月岡家は、自由になれるのですから」

着物の袖で顔を隠し、しくしくと泣き出す母親を、これ以上で見ていられなかった。夢時は、居た堪れなくなり、立ち上がると、部屋から飛び出した。

「夢時殿！」

母親の制する声を見捨て、夢時は屋敷の外へと飛び出した。

「旦那様！」

玄関前をほうきで掃いていた使用人が、驚いて声をかけてきたが、止まることはなかった。

「は、は、は…」

激しく息を切りながら、夢時が目指した場所は、海だった。

町中を走る夢時の耳に、町人達のひそひそ話が飛び込んできた。

「怖いわ…」

「どうなるんだ、俺達は」

「戦になるのか？」

不安そうな町人の声は、去年のどんちゃん騒ぎとは、明らかに違っていた。

「この国は…なぜ」

夢時は、黒船に対する幕府の対応が気に入らなかった。

怯え、顔色を伺う外交など、認められるはずがなかった。

「何の為の刀ぞ！何の為の武士ぞ！」

遠くに黒船が見える場所まで来た時、夢時は海に向かって、いつのまにか叫んでいた。

「何の為の…男ぞ…」

夢時の瞳から、一筋の涙が流れた。

「夢時…」

その時、突然後ろから、声をかけられた。

夢時は、その声にはつとなり…涙を袖で拭ってから、振り返った。

夢時から少し距離をおいて、1人の若い侍が立っていた。見守るような…やさしい目を向けて。

「新之助…」

まだ初々しい雰囲気が残る侍は、悲しげな背中を見せる幼なじみに、話し掛けずにはいらなかった。

振り返った夢時の目が、赤いことに気付き、新之助はすぐに、話し掛けたことを悔いた。

顔を背けるように、新之助はすぐに頭を下げた。

「すまない。見るつもりはなかったんだが…」

「どうしてここに？」

それも答えにくかった。

しかし、答えなければならぬ。

新之助は、距離を置いたまま、

「お主の姿を見て…」

お主の涙に気付いて…。

しかし、すべての言葉を口には出せなかった。

唇を噛み締める新之助から、夢時は顔を逸らすと、真つすぐに黒船を睨み、

「今は一大事じゃ…町中を走って、何が悪いか」

少し怒ったような口調になる夢時に、新之助はさらに心を痛めた。

これ程の思い…幾許の思いを…新之助は心にしまってきた。

どんなに鍛えようが、どんなに着物で隠そうが…鬨で誤魔化そうが…。

（そなたは、女子ぞ…）

それに気付くのは、多分自分だけであろう。幼なじみである自分だけ。

それくらい完璧な男を…武士を演じなければならない幼なじみの考えなど、新之助はわかっていた。

「ゆくのだろ？」

「え？」

言われるだろうと予測していた内容と真逆の新之助の言葉に、驚き…夢時は振り返った。

「いつやるつもりだ？」

真剣に自分を見つめる新之助の目力に、夢時は真意を口にしてしまった。

「今夜…」

「わかった」

新之助は頷いた。そして、すぐに夢時に背を向けると、

「今は、幕府の規制が厳しい。しかし、混乱している」

新之助は、一度言葉を切ると、

「船着場には、知り合いがいる。一隻くらい何とかなるだろう」

「新之助」

「今晚…ここで会おう」

新之助が去ってから、夢時は屋敷に戻らなかった。日が落ちても、ずっと海に浮かぶ巨大な黒船を見ていた。

冷静に観察すると、日本の船とまるで違う。海に浮いていることも、信じられなかった。

まるで…勝てる気がなかった。

だけど、それで怖気づいては、武士が廃る。

日本の…武士の意地を見せつけなければならないのだ。

（せめて、一太刀）

夢時が決意を固めていると、岸边に、一隻のぼろ船が近づいてきた。

その中には、新之助が乗っていた。

船頭がいない。

一番近くの船着き場に寄せたぼろ船に、夢時は駆け寄った。そして、激しく揺れる船内に、何とか乗り込んだ。

「大丈夫か？」

そんな夢時を支えながら、新之助は申し訳なさそうに口を開いた。

「こんな船しか調達できなかった。それに…すまない。皆、近づきたくないそうだ」

夢時はフツと笑うと、

「仕方あるまい」

「…」

新之助は、乗せる時に夢時の体に触れ、改めて思った。やはり華奢だと。

「お主…」

突然、夢時が顔を覗き込んできた。間近で顔を見られ、心の中を見透かされたのかと思った新之助の鼓動が、激しくなった。

しかし、夢時はまったく、予想と違う言葉を口にした。

「よいのか？私は…」

「…ああ」

新之助は、夢時に最後まで言葉を言わせなかった。

「俺は次男だ。別に構わん。それに、武士ならば…ゆかねばならぬ」

新之助の目を見るだけで、その決意がわかった。

（昔から言いだしたら、きかぬ）

それは、お互い様だった。

しかし、夢時は…新之助が友人として付き合ってくれと、思っていた。

夢時は、新之助の隠した思いには、気付いていない。

「いくぞ」

新之助が漕ぐと、船はゆっくりと闇の中…水面を滑るように、進み出した。

新之助は漕ぎながら、ずっと見つめていたくなる夢時の横顔から、強引に顔を逸らした。

夢時には、黒船しか見えていない。

「……今夜は、月も星も綺麗だな」

心の中で、自分に笑ってから、夢時の緊張を解こうと、新之助は他愛もない話題をふった。

すると、夢時は初めて星空を見上げた。

「本当だな」

見上げたときの夢時の首のラインの輪郭のしなやかさと、星を見つめる表情の柔らかさに、新之助は堪らず口にした。

「黒船には…俺が潜入する。お主は帰れ」

「え？」

夢時は耳を疑った。

新之助は、夢時の反応を無視して、言葉を続けた。

「今、幕府は…いや世間は混乱しておる。その混乱は、大きくなり…どうなるかわからん。もしかしたら…」

「何が言いたいのだ」

夢時は、新之助のことをよく知っている。そんな言い方では、誤魔化されない。

言葉の裏に、真意がある。

新之助は、しばらく口をふさいだ。

しかし、やがて…願いを言葉にした。

「お主が、武士ではない…別の生き方ができるようになるかもしれない…」

「な」

夢時は絶句した。

幼少の頃からの仲である。ばれているかもしれない。

しかし、だからこそ…口にすることはないだろうと、夢時は勝手に思っていた。

「お、お主は！」

思わず、立ち上がった勢いで、船が揺れた。しかし、夢時は気にせ

ずに、新之助を睨み付けた。

「お主は！」

言葉が続かない。

新之助は漕ぐ手を止め、

「女子であるお主が、死ぬ必要はない」

ただ真っ直ぐに夢時を見つめた。

その真剣な言葉と瞳に、夢時は刀を抜いた。

研ぎ澄まされた刀身が、月明かりに反射して、妖しく光った。

「今の言葉、取り消せ！」

夢時は刀を握りながらも、小刻みに震えていた。真実を告げられた動揺が、今まで張り詰めていた緊張の糸を切ったのだ。

「俺は、次男だ！嫡男として、育てられたお主と、俺とでは世間の目も違う！だけど……」

感情が爆発し、思わず立ち上がった新之助。

と同時に、小さな音がした。

「え……」

驚く夢時の目の前で、新之助は崩れ落ちるように、倒れた。激しく

揺れる船内。

その揺れで、夢時が抜いた刀の輝きが、水面に乱射した。

新之助は、撃たれたのだ。

鞘から抜いた瞬間の刀の輝きが、船の接近を向こうに教えた。

その為、黒船から、狙撃されたのだ。

興奮状態にあつた二人は、刀身の反射に気付かなかった。

「新之助！」

船はいつのまにか、黒船のすぐ近くまで来ていたのだ。

潮流の速さと、闇に同調した黒船の船体が、距離感を狂わしたのだ。

「逃げろ……」

新之助は、刀を持つ夢時の手に、手を重ねた。

「お主に…刀は似合わない……」

「新之助！」

夢時の絶叫は、突然鳴った汽笛によって、かき消された。

巨体を動かした瞬間、大きな波が起こった。そばにいた小さなボロ

船は、その波に巻き込まれ…ひとたまりもなかった。

船体はひっくり返し、夢時と新之助は海へと、叩き落とされた。

（夢時…せめて）

新之助は海に落ちても、夢時の手を離さなかった。

（せめて…来世はともに）

一度ぎゅっと握り締めた後、新之助は…思いを噛み締めた。

（だから…現世は、どうあっても生きろ！）

沈んでいく新之助が、夢時の手を離そうとした時、別の手が、新之助の腕を取った。

（夢時…）

夢時の左手が、新之助の腕をしっかりと掴んでいた。

そして、右手に持っていた刀を離した。

海の底に消えていく…刀。

（ああ…）

その時、真っ暗だった海中に明かりが灯った。

月がちょうど、真上に来たのだ。

その瞬間、奇跡が起こった。

海中でも、微笑む夢時の顔を見ることができた。

（そなたを…愛しておる）

二人は、互いに微笑みながら、海中へと沈んでいった。

決して、手を離すことなく。

ほんの少しの出来事は、誰にも知られることなく…終わりを告げた。

なぜならば、これから来る激動の時代は、些細なことなど気にする
余裕は、なかったのだから。

夢時が拘った。

いや…すべての武士が拘ったものは、ほんの些細なことで始まり、
終わりを迎えてゆく。

その流れを止める程の力を、人は持っていない。

それ故…人には、選択の余地があまりない。

時の流れにただ、流されていくのか…。それとも、少しだけ前へ、
自らの力で泳ぐのか…。

流れに逆らうことは、できないのだから。

しかし、どんなに自分の力で泳いでも…岸に辿り着くとは限らない。

途中で、力尽き…沈んでしまいかもしれない。

時と月。

無常な夜。

すべて夢。

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3252k/>

月下の契り

2010年10月8日14時05分発行